

そのような時、ふと気づくことがあります。桜だけでなく、常に私たちの身の回りには、親神様が陽気ぐらしをさせやすすくするための数え切れない程の喜びをお与え下さっている事を感じるのです。本日は、親神様からお与え下さいます、様々な事柄に気付きを感じさせて頂いたお話をさせて頂きます。

先月は、教祖誕生祭・婦人会総会へ大勢の皆様がおおぼへとお帰り下さいました。私も昨年より、副主任の御用を頂き詰所の受け入れ側にまわらせて頂きましたが、何より、今年も事故なく無事に終わらせて頂き有難い限りです。そして何より、普段おぢばへ帰りたくてもなかなか帰る事が出来ない方には一年に一度の楽しみの時間であることと思うのであります。そこで、おぢばへ帰るとは何を目的に帰らせて頂くのかを私自身に置き換えて考えさせて頂きます。

ていない所です。建築中の建物2棟から火が上がり瞬間に全焼していききました。その最中私はその火事を呆然として見て居たのですが、外に出て一番近い場所に行くと思いが、焼けるような熱さです。火事の現場の隣のお宅はすぐに火が移り、住めない程燃えていきます。その日は風も弱く、それでも教会は風上にあつたため火の粉も飛んで来なかつたので、私はあまり不安を感じることはありませんでした。が、翌朝明るくなつてから火事の現場の周りの家を見に行くと、教会の隣の家は熱でガラスが割れ、風下の家は何件もが壁が焼け、屋根が溶けるなど教会よりはるかに距離がある家にまで被害が出ていました。それを見た時、うちの教会は距離にしたらもっと近くにあるし火がついたら瞬間に燃えてしまうような古い木造建築ですので、改めて有難かつたなあとおぢばへ無難にさせて頂いたのだと感じさせて頂きました。火事が教会へと飛び火していたら、大きな事情へとつなげた事だと思えます。そして、御用とはいえ、おぢ

ばへと帰る事も出来なくなつたかもしれない。おふでさきに、なんどきにかいりてきてもめへ〜の、心あるとハさらにもうな。十一-78とあります。これは自分の気持ちで決断しておぢばへと帰つて来たようでも、親神様にお引き寄せ頂くからこそ帰る事ができるとの教えであります。おぢばへ帰らせて頂けることは、おぢばへ帰らざるに於いては、全の御守護のお礼を申し上げ、教祖の御前で日々のお礼と抱えている事情や身上を打ち明けさせて頂き、縋る事が出来る有難い時間です。でもそれだけではなく、何かお引き寄せ頂く中に、それぞれに課題を頂いている事にも気付かせて頂くのです。

私、おぢば詰所にて、帰参者の受け入れや送迎など、4月でしたら筍堀りなど目に見える動きもありますが、そのようなお役を通して、帰参者の皆様に喜んで頂ければ、自分の喜びに繋がる事にもなります。稿本天理教教祖伝第三章み

ちすがらの一節に、「この家へやつて来る者に、喜ばさずには一人もかえされん。親のたあには、世界中の人間は皆子供である」とあります。このお言葉をお案させて頂くと、教祖ひながたの道を目指す私達は、普段地元においてもそうですが、おぢばへと帰つた際にはなおさらの事、他の人から喜びを与えられることを待つのではない、自ずから勇み、喜ばせて頂かねばならないのであります。この事は、詰所の受け入れ側、帰参者に分かる事無く、おぢばへお引き寄せ頂く人達すべてに当てはまる事だと考えます。

みかぐらうた七下り目の八つで教えて下さいます、やしきハかみのでんぢやで、まいたるたねハみなはへるとあります様に、おぢばへとお引き寄せ頂き喜びの種を蒔けば、必ず先に大きな喜びをお見せ頂くのだと気づかせて頂きます。

さて、話は変わりますが、今月より令和との新しい年号の元、日本の国も新しい区切りを迎えました。そこで改めて今までの平成を振り返りま

すと、私の身の回りに起こりましたこの30年間は当初より節の多い時代だったと感じていました。最初に平成元年母親が55歳で出直し、直前には部内教会の会長さんの出直しもありました。私は今年55歳になります。いつの間にか母親と同じ年になりました。今年母の30年祭を迎えますが、もう少し長生きしてもらいたかつたなと同じ年になりしむじみ感じます。その後も翌年には結婚し、その翌年会長就任、又その翌年には前会長である父の出直し、そして長男出産とそれからしばらくは、平穏な年はないほど様々な嬉しいこと悲しく辛い事の節をお与え頂きました。人は辛いことは良く覚えていられるものです。しかし、喜べる事はその時ばかりで、ごく当たり前のように通る過ぎてはいないでしょうか。

私は、短い間に両親2人を出直しという形で亡くしましたが、家族の人数としては家内に嫁いで来てもらい子供も3人お預かりする事ができ、結果家族は増えていて寂しい思いなどする事もなくお連れ